

犬は絨毯を引掻く

アメリカ人のムーア (J. H. Moore) \*がある学校で倫理学の講義をした。初めの五講は動物と人間における“野蛮性の遺留”(Survival of Savage)を説いたものである。イギリスの唯理協会によって単行で出版された、とても面白く実益のある本である。彼は歴来の宗教者・道徳家が論争しても決まらなかった人間の罪悪の問題をすべて野蛮性の遺留ということに帰し、ただ犬が絨毯を引掻くことを知りさえすれば、すべてが理解できると考えた。わが家に絨毯はないが、已に物故した老犬 Ess は古稀の年齢で、引掻く気力もなかった。だが夏に寄寓した客分の犬 Bona と Petty はほんとうに毎日ゴリゴリと煉瓦を敷いた地面を引掻き、ある犬たちは寝る前に何度もぐるぐる回った。これはどういうわけだろう。ムーアによれば、犬は狼の変ったものだから、狼であったころには、絨毯などないばかりか、煉瓦敷の地面でさえ寝られず、終日食探しに奔走して、草臥ればそこで横になった。しかし山林の中はどこも雑草ばかりで、まずそれを引掻いたり踏みかためたりしなければ寝られなかった。いまでは、出来あいの場所があつて高枕で、もうわざわざ気を遣うことはないのだが、むかしの癖がやはり出て来て、かのつまらぬ動作をする。人間でも多くの野蛮(あるいはまだ禽獣の)時代の習性が残っていて、もともとすでに無用かあるいは反って有害なものとなっているのだが、時によって相変わらず発動し、そこで罪悪、および別の様々なでたらめな迷信的悪習となる、ということだ。

この話は確かにまちがってはいない。ふつうの社会では自分に関係のない恋愛事件に対してすべて猛烈な憎悪を抱くが、これも正に野蛮性の遺留の一証であると思う。ここ何日か冬季の創造期で、ちょうど子どもたちの言う門外の“犬もけんかしている最中で”、わが家のチンコロはたいていしっぽを垂れて帰って来る、彼の背中はかなり傷を負っているが、みな先輩たちの与えた懲罰なのだ。人々が失恋者に同情するのは、あるいは弱きを扶ける“義侠心”から出たものと言えるかもしれない。恋を成就した者への憎悪の動機に至ってはそのような正々堂々たるものはなく、実はただチンコロの背中を咬む変相にすぎず、禁欲、あるいは放縦な生活を実行している人間が特に“風化”に干渉しようとする、つまりそういうわけなのである。

もう一点、野蛮人はみな生殖崇拜の思想を持っている。これは本来は何のおかしいところもない。ただ彼らは性の現象をあまりに神奇に見すぎるので、多くの奇妙奇怪な風俗が生まれる。フレイザー博士の『金枝篇』(J. G. Frazer; The Golden Bough ——わたしが持っているのは一巻の節略本である。五六年前の『東方雑誌』によると、これは二千年前のギリシアの古書で、今ではすでに散逸したそうである)で、「栽培に於ける性の影響」を講じてとても詳しい。(その著書の Psyche's Task の中でも挙例がはなはだ多い。)野蛮人は植物の生育の手続きが人類と同じだと思うので、性行為の儀式が稲麦や果実の繁殖を促進できると信じたのである。こうした実例はとても多く、ジャワでもそうであるし、ヨーロッパでは現在では当然同じような習慣は見つからないが、遺跡はまだ存在する。たとえばドイツのある地方では秋の収穫のころ、麦刈りの男女がいっしょになって地面をころげまわらねばならないのなど、つまりその一例である。両性関係がこのように偉大な感応力を持っているからには、動植物の生長を促進することができるし、一

方ではやはり自然の進行を妨害あるいは阻止したりすることもできる。だから部落によってはその時期に特に禁欲を励行して、そうでなければさまざまな果実が稔らず、百草は成長しないと考えた。社会で他人の恋愛事件に反対するのは、つまりこうした思想の再現である。われわれはその中に動物的な嫉妬が含まれることを見て取るけれども、やはり性に対する迷信を重要分子とし、彼らが無意識的に両性関係が天行を左右する神通力を持っていると信じており、常習的でない恋愛は必ず社会の災禍を引起し、全群に災難が及び、(現代語でこれを風化の損壊という、)事は生命にかかわるので、そのような猛烈な憎悪が生まれるのである。社会の常習的な結婚についての態度を調べてみれば、上文に言う所の誤りでないことをもっと明瞭にすることができる。ふつうの人間は性の問題に対してみな不潔という観念をいだいており、精進潔斎する人間はさらに新婚や出産の場所を避け、汚穢に触れるのを免れようとする。みんな知っているが、宗教上の汚穢は実は神聖の一面であり、エーゲ海の訳すことの出来ない術語“タブー”(Tabu)という言葉は、その中の消息を表わしている。それが神聖な魔力を含むために、受け容れることができない人や物を損害するに十分で、それで彼が帝王、法師、あるいは成年の女子であろうと彼を隔離し、そうして危険を免れるのである。ある場合はこれを汚穢と称するが、汚穢と神聖は実は一物であって、ある場合はひっくり返して危険な力と称してもよい。社会が好んで閑事に口出しをし、両性関係において最も厳しいが、これは何故だろうか。われわれは野蛮性の遺留ということに着眼すれば、一部分は動物の配偶を求める本能から、一部は野蛮人の性の危険力に対する迷信から出ていることが見て取れる。このご先祖の遺産は、われわれ各人が一分ずつ分有し、なかなか脱出せない。しかし科学の力を借りて、実際の状況を知り、理知をして随時自ら警戒することができるならば、当然いくらかは利点があるだろう。道徳の進歩は、決して迷信の増加にはよらず理性の清明さによるのである。われわれは中国の性道徳の整頓を希うが、教訓条項の増加は希わない。ただ知識の解放と趣味の修養を希むだけである。科学の光と芸術の空気は、何時になれば青年の心理に侵入し、新しい両性の観念を造りあげることができるのだろう。われわれはいわゆる西方文明国の大勢に鑑みて、もし本国のみが天分に恵まれていると確信しているのでなければ、一時には何の希望もないようだ。しかしながら言うだけでも姑くは言わざるを得ない。(民国十三年十二月)

※初出：1924年12月1日『語絲』第3期

---

\* J. Howard Moore. Savage Survivals. Charles H. Kerr and Co. 1916. pp. 52-53.